

近代わが国の同化主義と沖縄の民族思想

——「沖縄学」に関する社会史的考察——

上間 創一郎

1. 序論—日本を相対化する視点—

日本民俗学の創始者・柳田國男は、「我々の学問にとって、沖縄の発見ということは劃期的の大事件であった。」と述べた¹⁾。小島瓊禮（1983）は、この柳田の見解について、「琉球学」との関連において、要旨次のように解説している。「琉球文化への興味とは、琉球の個性豊かな地域文化を通して、日本文化の歴史的な本質を捉えようとするところにある。琉球学は、一つの地域研究であり、それを特別に〈琉球学〉と呼称するのは、琉球文化が日本文化の半分を担うほどの独自性と空間を持ち、地域文化を総合的に理解しようとする地域研究の試みに相応しい質的な深さがあるからである。柳田は、一見異質的な琉球文化の中に普遍性を認め、その研究に日本文化の原型・古層を探求したのである。」このような柳田國男の沖縄理解に象徴されるように、わが国諸学問領域において、「沖縄」の存在が、その特異な歴史的・文化的・地理的条件から、「日本」を相対化して捉える重要な研究視点を呈示してきたことは、今日、広く自明に等しいところである²⁾³⁾。

近代以降のわが国アカデミズムにおいて、所謂「沖縄学」（琉球学 Ryukyulogy）と称される一つの学問思想体系が成立・発展を見ていることは、他の地方諸府県に比して、沖縄の歴史文化が際立って学事的な可能性を所有し、かつ、その学際的な発展性を涵養してきたことを物語っているといえよう⁴⁾。沖縄学は、明治期に柳田國男の学的な陶化を受けた伊波普猷（1876-1947）によって創

始され、東恩納寛惇、島袋全登、比嘉春潮、G・H・カー等、沖縄学系列に連なる後続の諸先学によって、今日に至るまで発展的に継承されている。そして、伊波の方法論と研究成果、及び、それらを支えている広大な学際的知見は、今日尚、沖縄を巡る思想・文化状況を強力に規定付けているといえよう。以上のような、沖縄の歴史文化を巡る思想・学問潮流に関する基礎理解を踏まえ、本論稿は、「沖縄学」を主眼とする沖縄の民族思想とその史的展開について、明治以降の近代わが国における「同化主義」政策との脈絡において、その社会史的・思想史的意味、ひいては、その思想的課題性を批判的に考察するものである。

2. 沖縄人の日本人認識

2-1. 山之口獏と植民地主義の眼差し

沖縄人の持つ特異な日本人認識を優れて象徴的にロゴス化した一文に、以下に引用する沖縄出身の詩人・山之口獏（1903-63）が提出した「会話」という詩篇がある。

お国は？ と女が言った。

さて ぼくの国はどこなんだか、とにかく
僕の煙草に火をつけるんだが、刺青と蛇皮
線などの連想を染めて、図案のような風俗
をしているあのぼくの国か

ずっとむこう

ずっとむこうとは？ と女がいった。

それはずっとむこう。日本列島の南端の一
寸手前なんだが、頭上に豚をのせる女がい
るとか、素足で歩くとかいうような憂鬱な
方角を習慣しているあのぼくの国か

南方

南方とは？ と女がいった

南方は南方 濃藍の海に住んでいるあの常
夏の地帯 竜舌蘭と梯梧と阿旦とパパイヤ
などの植物たちが、白い季節を被って寄り
添っているんだが、あれは日本人ではない
とか、日本語は通じるかなどと話し合いな
がら、世間の既成観念達が寄留するあのぼ
くの国か

亜熱帯

アネッタイ！ と女は言った

亜熱帯なんだが、ぼくの女よ、眼の前にみ
える亜熱帯が見えないのか！ このぼくの
日本語の通じる日本人が、即ち亜熱帯に生
れたぼくらなんだとぼくはおもうんだが、
酋長だの土人だの唐手だの泡盛だのの同義
語でも眺めるかのように世間の偏見たちが
眺めるあのぼくの国か！

赤道直下のあの近所⁵⁾

山之口貌が表現するこのような沖縄人の民族意
識を巡る思索は、日本本土と沖縄との間に横たわ
る著しい歴史的・文化的・地理的差異性から由来
する、沖縄人の民族的アイデンティティの内面的
葛藤である。つまり、近代以降のわが国における、
本土からの植民地主義的な眼差し、いい換えるなら、
社会的先進性の高みに立った観光主義的な眼
差しに苦悶する沖縄人の内攻的な心的葛藤である。
これは、「植民地主義」(colonialism)、「観光主義」
(tourism) という、中央から僻遠の南島を「ガリ
ヴァーの感覚」によって眼差す、マジョリティの
認識論的・ジェンダー論的な暴力に対するマイノ
リティの切実な抗議の叫びとも解釈されよう。

山之口が提出したこのような沖縄人の本土人と
の民族的関係性を巡る心的葛藤を解義する上で、
吉本隆明(1969)が示した次のような日本/沖縄
認識が至当な説明となろう。「私たちは、長い間、
弥生式文化系統の威光に無意識の内に寄りかかっ
て、琉球・沖縄を文化的、あるいは、種族的な辺
境と見なす考え方に狃らされてきた。そして、こ
の辺境感は、琉球・沖縄土着の人々自身にとっ
ても、場末的な終末観となつて、本土への不信と本
土への弱小感として植え付けられてきたのであ
る。」(傍点は筆者による。)このような理解から、
上記の一篇は、「日本人の沖縄人認識」に対する
鋭利な批評性を持つとともに、近代わが国の植民
地主義・同化主義に関わる優れて思想的・社会
的・政治的な問題性を示唆するものといえよう。
以上を踏まえ、本章では以下、近代わが国におけ
る沖縄への同化主義政策を考察する上での前段的
理解として、沖縄から日本への被同化主義的眼差
し、つまり、沖縄人の歴史的な「日本人認識」の
特性について考察したい。

2-2. 日本人認識と異族の論理

東江平之教授は、沖縄人に普遍的な思考様式を
整理・体系化した嚆矢的、かつ、包括的な研究論
文『沖縄人の意識構造の研究』(1963=1991)に
おいて、「沖縄人の日本人認識」について、あら
まし次のように述べている。「沖縄人にとって、
初対面の相手が沖縄出身であるか、他府県出身で
あるかが判明することは、極めて重大なことであ
る。沖縄出身であると判ると、地域差その他は、
殆ど問題にならないくらいのものになる。他府県
出身者と判明した途端、差意識が現実の差以上の
ものに及び、その後は、例えばその人が青森県出
身であるのか、山口県出身であるのかは問題にな
らない。」この指摘は、沖縄人の日本人認識にお
ける顕著な特異性を示す。このように、沖縄人と
って、本土人は悉く同質化して対象化・認識化
される。このような沖縄人の日本人観・本土人観
は、東江教授によれば、「近いもの同士は、実際

以上に近似して知覚され、違ったものは、逆に実際以上に違って知覚される。(中略)それは、本土と沖縄の間に大きな潜在的距離感が横たわっていることと関連する。この距離感は、一般的にいうと、本土と沖縄双方にあるといえる。また、沖縄人にとって、他の府県間の差が問題にならないということは、沖縄と本土の間の知覚された距離の大きさを物語っている。〈本土〉という変則的な語が通用しているだけでも驚異である。」ということである。このような認識を踏まえ、同教授は、さらに「本土」(mainland)という言辞の持つ概念性について語用論的に論究し、本来、普通名詞であったこの語句が、沖縄では、北海道、本州、四国、九州、及び、その周辺の島々、つまり、沖縄を除く「日本」全てを包含する、未分化の集合的・包括的な地理的概念として、極めて変則的に「固有名詞化」していることを指摘している。

以上、東江教授が指摘するように、沖縄人が他府県人(本土人)を府県の別なく、押しなべてモノリシックに認識する日本人認識は、沖縄がこれまで所有してきた歴史的・文化的・地理的・政治的な諸条件によって生成され、今日尚、沖縄人の民族意識・国家意識を、その基層において、根深く形成付けている他府県人に対する「他者意識」、つまり、「異民族認識」である。

四世紀末の大和朝廷による政治的統一で形成された「日本」の古代国家成立のその以前から、独自の国家圏・文化圏として存立し、明治近代に至った琉球・沖縄の歴史的・地理的条件こそが、沖縄人の日本人全体に対する認識論的な距離感、つまり、他府県人を全て同質化して対象化する認識方法・認識態度を醸成してきたものといえよう。例えていえば、かつて古代日本において、大和朝廷に異民族視され、「熊襲」と呼称されていた九州人や、「蝦夷」と呼称されていた東北人が、大和中央政権の勢力に対抗したように、現代日本社会において尚、彼ら九州人や東北人が、その民族的ナショナリズムと反中央権力的な思想態度を継承しているとしても、沖縄人にとっての「日本

人」とは、そのようなわが国諸地域の人々全てを包括的にステロタイプ化して異民族視した「日本人」なのである。このような沖縄人の持つ日本人観・本土人観は、先述の山之口貌に見る民族意識の相克を含め、島嶼性・離島性・辺境性という、沖縄の地理的な vulnerability に起因するものであり、したがって、日本の他のどの地域にも見られない特異、かつ、根深いものである。

吉本隆明は、「異族の論理」(前掲 1969)という論考において、「文化の最上層における変動も、種族ごとの固有生活の文化的な基盤に対しては、さほどの変動をもたらすものではない。」と論じている。この吉本の「異族の論理」が示唆するように、明治期の「琉球処分」という、政治的・社会的「変動」に伴う中央政府の沖縄同化政策、及び、後段に詳論する沖縄人側の思想的・学的な同化努力によって、有史以来、日本人への異民族観念を下意識に把持し続けてきた沖縄人がそれを超克することが、思想的なアノミーを見るのは蓋然的な帰結であり、このことは、本論の主題「近代わが国の同化主義と沖縄の民族思想」を考察する上で、不可避の前提的理解といえよう。

2-3. 日本人認識における思想的命題

以上見たように、沖縄人の日本人(本土人)への認識方法・認識態度には、本土社会内部における地域的異質性を超越し、日本本土人は全て包括的・同質的に他者化され、認識される、という逆説的なステロタイプがある。つまり、南端の視座から日本本土を包括的に相対化して捉えつつも、本土社会内部における「中央」対「地方」、あるいは、「都市」対「田舎」等の地域的差異性や地域的対立性を看過し、日本本土人を一概化して等閑視する、視点の硬直性が見られるのである。前節において、東江教授が指摘した沖縄における「本土」という言辞の持つ変則性・特殊性、あるいは、沖縄人が本土人を指す呼称「ヤマトウンチュ」(「大和人」の方言発音)が胚胎する意味内容は、まさに、上に見たようなモノリシックな日本

人認識、換言すれば、本土人への包括的な「他者意識」を示すものといえよう。

同様に、沖縄人にとって日本人は、権力支配者も被支配者も、ホーリスティックに同質の「日本人」として認識される、という点にも、沖縄人の日本人認識における特性として理解を要しよう。つまり、沖縄人の日本人認識には、日本社会内部における「国家権力」対「庶民大衆」、「ブルジョアジー」対「プロレタリアート」等の階級論的な支配・被支配の関係性、あるいは、部落問題等の社会階層上の差別・被差別の関係性を超越、あるいは看過し、日本人（本土人）を極端に全体論的に同質化して認識し、かつ、他者化する心的傾向が強固に見られるのである。ここに明らかなように、沖縄人の日本人認識の態様には、視点の一面性・皮相性、つまり、階級論的・垂直軸的な視点の欠如が見られ、このことは、次章に詳論する「沖縄学」の思想的限界性を含め、沖縄の民族思想における思想体質の脆弱性・不毛性として指摘されるところである。ここで、後論に先立っていえば、以上の理解は、日本/沖縄の民族矛盾に拘泥する伊波普猷とその学問思想における「階級論的視点の欠如」という批判的論点に収斂化されることとなる。つまり、「民族闘争」(ethnic strife)を「階級闘争」(class strife)へと解消しようとしたスターリニズム (Stalinism) 的な民族・階級理論へと昇華し得なかったことが、伊波沖縄学におけるイデオロギー的・運動論的な限界性として、比嘉春潮をはじめとする後の多くの伊波普猷研究者によって、繰り返し指摘されてきたのである。畢竟するに、「沖縄」対「日本（非沖縄）」という、硬直化した単純な二元論的日本人認識を解体・止揚し、より重層的、かつ、巨視的なパースペクティブから「沖縄と日本」を捉え返すことが、沖縄の民族思想における思想史的なアボリアといえよう。

3. 沖縄学と同化主義—伊波普猷の日琉同祖論—

3-1. 明治政府の同化政策と内発的同化志向の生起

「沖縄学と同化主義」についての考察に進むにあたり、本節では、近代日本政府の沖縄に対する政治姿勢を瞥見しておきたい。近代日本帝国における国民意識の形成とその中央集権化、つまり、国民同化政策は、明治維新政府によって政治的・強権的に行われた。近代沖縄におけるそれもまた、維新政府の「琉球処分⁶⁾」という、強権的政策によって推進されたものであるが、歴史的・地理的に長く日本本土とは別個の政治体として存立し続けてきた琉球・沖縄に対する同化政策が、より困難、かつ特殊なものであったことは論を待たない。日本各地域における国民意識形成の諸態様と、沖縄におけるそれとの著しい相違性は、ジョージ・H・カー『琉球の歴史』(原題 *Ryukyu: Kingdom and province before 1945*, 1956)、比嘉春潮『沖縄』(1963)等、沖縄研究の碩学が残した著述にその歴史事実の一つ一つを見出すことができ、そこに近代沖縄人が体験した日本同化過程の特殊性を見ることができよう。明治帝国政府による沖縄同化政策は、以下に大略述べるように、より巧妙、かつドラスティックに展開されたのである。

比嘉春潮によると、明治政府による沖縄における諸制度改革の中で、教育行政の確立による子女教育の普及だけは、琉球人の早急な「皇国臣民化」という眼目から積極的に推進された。つまり、薩長閥を主体とする明治維新政府の指導者たちは、日本の帝国主義的植民地拡大政策における「南進政策」という領土的野心と軍事的要請から、沖縄を地理的な足場として確保するとともに、沖縄人を早急に忠良なる「帝国臣民」に染め上げる「皇民化教育」の徹底に意を注いだのである。

しかし、地租改正、選挙法施行等、その他の制度改革については、政府は、「急激な改革は人心を動揺させ、社会不安を招く」として、他府県に

比して、意図的・政策的に著しく停滞・遅延させる政策を採った⁷⁾。所謂「旧慣温存政策」である。この政策により、明治初期の沖縄は、本土他府県との法制度上の歴然たる差別状態に置かれた。例えば、地祖改正は約三十年（本土 1873 年、沖縄 1903 年）、市町村制施行は約四十年（本土 1879 年、沖縄 1908 年）、衆議院議員選挙法施行は約二十年（本土 1890 年、沖縄 1912 年）、他府県から遅れて実施された。このような諸制度整備の政略的な遅滞が、沖縄の社会的後進性を助長し、いきおい、沖縄人の心身に強烈な被差別意識を植え付けたのである。このような政治的・制度的な差別を伴う明治政府の対沖縄政策は、沖縄の日本への国民的同化の推進を図る上で、極めて重大な奏功性をもたらすこととなった。なぜなら、このような上からの差別的施策は、下からの、つまり、沖縄民衆側からの熾烈な差別脱却志向を惹起し、それが、沖縄内部からの積極的・主体的な日本同化志向とその実践的運動を生んだからである。それは、具体的には、ジャーナリズムとアカデミズムにおける急進主義的な同化主義の発揚であった。1893 年（明治 26 年）に創刊された沖縄史上最初の言論機関となる新聞「琉球新報」は、その創刊の趣旨として、「偏狭の陋習を打破して国民的特質を発揮し、地方的島国根性を去りて、国民的同化を計るものなり。」（傍点は筆者による。）との文言を標榜し、沖縄人の日本同化推進を鼓吹した⁸⁾。

翻って、沖縄学の鼻祖であり、啓蒙的社会思想家の伊波普猷は、「日琉同祖論」の提唱と実証を自らの学問研究の至上命題とすることで、沖縄人の日本国民同化をアカデミズムの立場から積極的に先導したのである⁹⁾。そこで、本章では以下、主題に掲げた「沖縄学」について、『伊波普猷全集』（1974）所収の多端な論考群を紐解き、その発揚から学説史的に概観することで、沖縄学とその「同化主義」（assimilationism）という学说的イデオロギーについて考察したい。

3-2. 沖縄学の発揚

ここでは、沖縄学の学的性格、及び、その発揚における明治期沖縄の歴史的・政治的背景について再確認したい。ドイツの民俗学者で、現代ヨーロッパにおける「沖縄研究」（Okinawan Studies）を代表するヨーゼフ・クライナー（Josef Kreiner）ボン大学教授の定義にならうと、「沖縄学」（Ryukyulogy）とは、琉球・沖縄を中心に、南西諸島全域に共通する歴史文化を一個の有機的全体として捉え、その普遍的な知識や総合的な認識を集積した「郷土研究」（heimatkunde）であり、「文化学」（kulturwissenschaft）であり、また、文化学の一系譜として、人間の精神によって創られたものを研究対象とする「精神科学」（geistwissenschaften）である¹⁰⁾。その学的基盤は、民俗学、民族学、文学、言語学、歴史学、人類学、宗教学等、広汎な学問領域を包括的に体系化・理論化した伊波普猷による学際的沖縄研究の学績であり、当該研究を総括した古典的大著として知られる著作『古琉球』（1911）によって、「沖縄学」は、わが国近代アカデミズムにおける一個の総合的全体として確立した¹¹⁾。沖縄学の黎明を成す伊波普猷初期の重要な論考群は、その多くが当著作に収録されている。

後段に詳論するように、伊波沖縄学的主要テーマは、「日琉同祖論」の提唱と構築にあった。明治初期に、大久保利通・伊藤博文¹²⁾を主流とする維新政府の帝国主義的植民地政策と警察力派遣による武力的威圧の下に断行された「琉球処分」、そして、それに伴う近代日本国家への国民的統合により、「琉球人」は、自らを「日本人」として、民族的・社会的・心理的に早急にアイデンティファイする必要に迫られた。この日本人との「国民的同化」という急務の政治的課題と時代的要請から、半ば不可避免的に「日琉同祖論」の提起は惹起されたのである。沖縄学は、このような近代沖縄人の、「明治日本」という近代国家社会における民族的・国民的アイデンティティの再構築を巡る思想的相克から萌芽した。畢竟するに、沖縄学の

生成には、沖縄人と日本人との淵源的な民族的・文化的同質性を学術的に立証し、明治新国家における「日琉統合の正当性」を演繹的に導出することで、いかに沖縄人の日本人としての「自己同一性」(national identity)の構築に結び付けていくか、という近代沖縄における指導的インテリゲンチヤの切実な民族的・学的パトスが作用していたのである。

このことはつまり、沖縄学の発揚は、伊波普猷という研究者のパーソナルな研究嗜好に留まらず、明治期沖縄の全ての人々が、いかにすれば日本社会における後進的な位置から脱却し、帝国の中にしかるべき地位を獲得することが可能であるか、という全沖縄人的な、優れて社会思想的な問題意識と、ニーチェのいう民族的ルサンチマン(ressentiment)が母胎にあったことを意味しよう。したがって、前節に見たような明治政府による諸種の差別的沖縄政策によって助長された社会的後進性からの脱却を、功利主義的な実践論からではなく、原理的・精神主義的な観念論から唱導・探求する学問態度が重視されたのである。畢竟するに、沖縄学の萌芽は、強いイデオロギー性を帯びた一種の水平運動的な「啓蒙学」(aufklärung)としての性格を顕著に表したといえよう。そこで次に、伊波普猷の啓蒙主義的な諸言説を跡付けることで、沖縄学における「同化主義」の態様を見ていきたい。

3-3. 日本同化志向と日琉同祖論の提起

柳田國男は、著作『海南小記』(1925)において、沖縄は、歴史的にも文化的にも日本と同一であり、「もともとわれわれは海からやってきた。」と述べている。また同様に、『海上の道』(1961)では、「華南あたりの稲作民が、沖縄に宝貝を求めてやってきて、さらに北上して日本列島に達し、村落国家を作った。」としている。このように、柳田が、日本民族は南から沖縄の島々を経て北上したという「北上説」を採り、沖縄に日本民族の起源を求めたのに対し、伊波普猷は、『日本文化

の南漸』(1939)において、当著を「太古以来、幾度か南下した日本民族の移動を民俗学的に考察した試論である。」(傍点は筆者による。)と序文に前提付け、九州南部から南下して沖縄に住み付いた種族が、沖縄人の祖先だと考える「南下説」を主張した¹³⁾。この日本民族の起源に関する両見解において、柳田・伊波は対立していたといえる。しかし、伊波沖縄学における「日琉同祖論の提唱と実証」という学問的政策にとって、日琉の民族的・文化的同質性を強調する柳田民俗学の学風と論法は、極めて好適であったといえよう¹⁴⁾。

このように、柳田國男の理論的影響を多大に享受し、その理論的枠組を継承した伊波普猷にとって、その学問思想体系の機軸は、沖縄と日本との淵源が、民族的・文化的に同一・同質にあることを、「民俗学」(folklore)を主眼とする人文主義(humanism)的な知見と論究によってジャスティファイすることにあった。つまり、沖縄が、歴史的・地理的に長く独自の国家圏・文化圏を維持してきたために、沖縄人は日本人を異民族視し、かつ、日本人から沖縄人もまた異民族視されてきたという、日琉双方の謬見を是正することに、伊波の学的パトスは注がれたのである。

「琉球処分は、実に迷児を父母の膝下に連れて帰つた様なものであります。」(『琉球史の趨勢』)、「明治初年の国民的統一の結果、半死の琉球王国は滅亡したが、琉球民族は蘇生して、端なくも二千年の昔、手を別つた同胞と邂逅して、同一の政治の下に幸福な生活を送るやうになつた。」(『琉球人の祖先に就いて』)とあるように、明治政府による「琉球処分」で成された「沖縄併合」という、帝国主義的な同化主義政策の歴史的意義に対して、積極的・賛美的な評価と学術的論拠を付与し、アカデミズムの立場からそれに確固たる柱石を立てることが、伊波沖縄学の主眼的なモチーフであった。つまり、伊波は、「沖縄併合」という、日本政府権力が国家上層から強要する政治戦略的な「同化政策」に呼応して、沖縄内部から、しかも、アカデミズムの立場から積極的に政策を

左袒する役割を担ったのである。この意味において、伊波理論の紐帯を成す「日琉同祖論」とは、被同化側からの謂わば逆説的・倒錯的な、つまり、上からの他律的・外発的な同化主義政策に対応する形で下からのヴェクトルを持つ自律的・内発的な同化主義であり、畢竟するに、この体制順応主義（conformism）的な同化主義は、近代化において後進的たらざるを得ない島嶼地域の危機意識的・急進主義的な「近代主義」（modernism）であり、「国家主義」（nationalism）あったといえよう。

伊波は、1879年（明治12年）に琉球処分に伴って断行された沖縄の廃藩置県について、次のように述べているが、この言葉は、伊波の研究者としての熱烈な「日本同化志向」を示している。「明治十二年の廃藩置県は、微弱となつてゐた沖縄人を改造するの好時期であつたのである。思想上に於いても、亦同じ現象が見られる。数百年来、朱子学に中毒してゐた沖縄人は、急に多くの思想に接した。即ち、活きた仏教に接し、陽明学に接し、基督教に接し、自然主義に接し、其他、幾多の新思想に接した。これまた賀すべき現象ではあるまいか。かく多くの思想に接して、今後の沖縄が、今迄に見ることの出来なかつた個人を差出すべきは、わかりきつたことである。今日となつて考へて見ると、旧琉球王国は、確に栄養不良であつた。して見ると、半死の琉球王国が、破壊されて琉球民族が蘇生したのは、寧ろ喜ぶべきことである。我々は、此点に於て廃藩置県を歓迎し、明治政府を謳歌する。」（『進化論より見たる廃藩置県』）

翻って、沖縄における女子教育の重要性を説いた次の発言においては、ある限りの面における、沖縄人と日本人との国民的同化の必要性を強調している。「君の家庭が全然日本風になるまで、君は君の慾望を少くして置かなければならぬ。君が、如何に国民的自覚をなして、忠君愛国を唱へたからといって、君の言語・風俗・習慣が、上官のそれと一致せない限り、君は君の上官に了解せられ

るものでないと。（中略）して見ると、沖縄に於て何よりも急務なのは、言語・風俗・習慣を日本化させることだ。否、女子教育をもつと盛んにして、家庭の改良を計ることだ。これやがて沖縄発展の出発点である。」（『沖縄女性史』、傍点は筆者による。）

これらの言説に示される伊波の「本土」に対する意識の様相、つまり、沖縄の文化を払拭し、本土との全面的な文化的同化を啓蒙する「同化志向」について、関広延（1990）は、戦前期以来一貫する沖縄の指導的インテリの「論理なき神がかり的信念」として筆鋒鋭く論駁し、戦後沖縄におけるアメリカ占領下からの「日本復帰運動」を、伊波の日本同化志向の延長線上に捉える認識視点を示している。この視点に照らすと、沖縄を後進地域とし、本土を先進的・近代的な地域と捉え、後進的な沖縄の「言語・風俗・習慣」という、あらゆる沖縄的なエートを自己否定して、本土と同質化、つまり、「日本化」することによって、先進性・近代性を獲得しようとする思想態度は、伊波普猷を胚胎として、今次大戦後尚、沖縄人に硬直的に遺伝する「同化志向」といえよう。

以上のように、伊波普猷は、「日琉同祖論」の提唱による日本人と沖縄人との国民的同一性の構築に学的気概を傾け、近代日本国家における沖縄人の国民的アイデンティティ獲得に挺身したのである。次節では、伊波の日琉同祖論提起を生んだ沖縄人の歴史的な思想状況について、さらに掘り下げたい。

3-4. 事大主義と同化志向

益田勝実（1964）は、『民俗の思想』（1964）において、伊波普猷について、次のように評している。「彼は、沖縄をいつでも本土から遠く離れて生活と文化の貧困にあえぐ郷土として背負い、その現状の認識と救済のために発言する使命に縛られていた。¹⁵⁾」このような使命を学的動機とする伊波にとって、前章に見たような、沖縄人の、日本人としての国民的自覚の歴史地理的な欠落と未

成熟は、黙過し得ない由々しき思想情況であった。

近代沖縄人の思想情況に関する解釈において、「事大主義」(todayism)という概念は、最も重要である。事大主義とは、確固たる主義信条を持ち得ず、ひたすら支配的な勢力に追従し、忖度によって身を処することで、因循姑息的な存在維持を志向する、極端に他律的な生存様式・行動原理を差す。上述のような沖縄の歴史的な思想情況に対する使命と問題意識から、「事大主義」という理解を導出し、問題化したのが、伊波普猷である。伊波は、『古琉球』において、沖縄人に宿弊的な事大主義的性向について、次のように筆鋒鋭く指摘している。「沖縄人は、生存せんがためには、いやゝゝながら媚妓主義を奉じなければならなかつたのである。実にかういふ存在こそは、悲惨なる存在といふべきものであらう。この御都合主義は、いつしか、沖縄人の第二の天性となつて、深くその潜在意識に潜んでゐる。(中略)しかし、これは、沖縄人のみの罪でもないといふ事を知らなければならぬ。」(傍点は筆者による。)また、同著中の「琉球史の趨勢」という一論考では、次のように沖縄人の事大主義的性格を語を極めて否定的に強調している。「沖縄人の境遇は、大義名分を口にするのを許さなかつたのである。沖縄人は、生きんが為には、如何なる恥辱をも忍んだのである。『食を与ふる者ぞ我が主也』といふ俚諺もかういふ所から出たのであらうと思ひます。誰が何といつても、沖縄人は、死なない限りは、自ら此境遇を脱することが出来なかつたのであります。これが、廃藩置県に至るまでの沖縄人の運命でありました。」さらに、伊波は、書を継いで次のように述べている。「慶長十四年の島津氏の琉球入りこそは、琉球に於ける空前の大悲劇で、其の時に負ふた痛手は、やがて、心的外傷となつて、今なほ彼等をなやましてゐる。(中略)島津氏の抑圧から受けた痛ましき傷害は、内攻して其の潜在意識中に、液中の沈滓の如く残つてゐる。しかも、其の沈滓は、彼等の意識状態を動かして病的ならしめ、甚だしくそれを掻き乱してゐるやうに

思はれる。彼等は、島津氏の武力を恐れて、公々然と反抗することは出来なかつたが、その反抗心は、変装して、見事に島津氏の監視を通れてゐた。両属政策から自然、内股膏藥主義、又の名、御都合主義が現れて来た。(中略)これ皆、島津氏治下三百年間の悪制度が馴致した悪民族性である。」(『南島史考』、傍点は筆者による¹⁶⁾。)

これらの諸言説を要約すると、伊波は1609年(慶長14年)の「島津の琉球入り¹⁷⁾」を沖縄に対する精神的な植民地主義と解釈し、それを沖縄人の事大主義思想を助長した真因に据えたといえる¹⁸⁾。つまり、伊波は、琉球人の事大主義思想は、薩摩の侵略と支配によって惹起され、かつ、助長されたと考えたのである¹⁹⁾。

畢竟するに、以上のような見地に立ち、伊波沖縄学においては、日本への国民的同化と日本人としての民族的アイデンティティの獲得こそが、沖縄人が事大主義思想を超克する絶対唯一の方途であった。いい換えるなら、「事大主義」という、精神奴隸的な被支配の思想と論理、及び、その要因を琉球史の諸相から拾い上げ、かつ、弾劾することで、沖縄人の日本人としての民族的アイデンティティ獲得の不可避的重要性を帰納的に唱導したといえよう。

4. 結語

以上のように、本論では、明治以降の近代日本と沖縄との社会的・思想的関係性について、「沖縄学と同化主義」という事象を通して考察してきた。本論における「同化主義」とは、一義的には、力を持つ多数民族が、弱い少数民族を自らの文化伝統を受け入れるように強いる政治思想とその政策を差す。近代わが国における同化主義政策には、本論で見た明治期の沖縄同化政策の他、アイヌ同化政策、また、日韓併合時代の朝鮮半島における朝鮮民族の同化政策がある²⁰⁾。本論において、これら近代わが国における同化主義政策の諸内容にまで敷衍する余裕はないが、ここにまとめとして、

近代沖縄同化政策の史的性格とその展開の概要を述べると、近代沖縄における「同化政策」とは、畢竟、天皇制国家としての「日本国家」と、その君主たる「天皇」自体への忠誠意識を扇動し、琉球人を天皇制国家に体制内化すること、つまり、「皇民化政策」であった。近代以降の沖縄人は、日本人に対するラディカルな他者意識、つまり、本土他府県人への歴史地理的な異民族観念を内に孕みながら、琉球処分以降の日本政府による「皇民化」という同化政策過程において、急速に天皇制国家としての日本の支配・権力構造の中に組み込まれ、「日本人意識」を造成していったのである。

本論で見たように、この「国民意識」(national consciousness)は、明治中央政府によるドラステックな沖縄同化政策・皇民化政策とともに、それに呼応する形で沖縄内部から生じた積極的・主体的な日本国民への同化志向、つまり、沖縄学の創始者・伊波普猷が提唱した「日琉同祖論」等の思想的・学問的運動によって、内発的・自律的に培養され、血肉化されたものである。その結果、近代沖縄人は、大宅壮一に「動物的忠誠心」と評言されたほどに、日本国民の中で最も狂信的・滅私的に忠君愛国思想・天皇制ファシズムに熱狂した県民として、日清・日露の戦役から満州事変、ひいては、今次大戦に至る日本帝国主義の悲劇的な拡大に投身したのである。このようなわが国の近代社会史的意味において、沖縄学が高唱した「同化主義」という学说的イデオロギーが、沖縄人の国民意識形成という思想的近代化に果たした意味と役割は、是非両面極めて意義深いものといえよう。

(了)

補註

- 1) 柳田國男「郷土生活の研究法」『柳田國男全集 28』p. 80, 筑摩書房, 1990 年。
- 2) 梅原猛(1989)は、日本文化を「沖縄文化」、「アイヌ文化」、「日本本土の文化」の三事項に類型化し、「沖縄文化は、アイヌとともに日本の基層文化

を残している文化であり、日本文化を知るには、沖縄文化とアイヌ文化を知らなければならない。」と主張している。

- 3) 因みに、ドイツ古典主義文学の代表作とされるゲーテの自伝的著作『イタリア紀行』(原題 *Italienische Reise*, 1816-17)の中に、「シチリアなしのイタリア」というものは、我々の心中に何らの表象をも作らない。シチリアにこそ全てに対する鍵があるのだ。」との叙述が見られるが、このシチリア島とイタリア本土との関係性を示すゲーテの視点は、沖縄と日本本土との関係性に優れて的確に適合するものといえよう。
- 4) 野口武徳(1980)は、「〈地域研究〉を基盤とする日本文化論・日本人論が隆盛を極めた昭和三十年代以降、〈沖縄研究〉は、都道府県単位で見た場合、他の追従を許さない卓越した存在であった。」と評している。
- 5) 門奈(1996)、pp. 95-96 より引用。門奈直樹教授は、明治維新以降の近代日本政府による沖縄同化政策の展開過程を解説する文脈において当篇を紹介し、山之口獺とその作品について、「本土から差別・抑圧されてきた宿命的沖縄住民の心情があった。」と評している。
- 6) 明治政府は、1872 年(明治 5 年)、それ以前に「王国」を形成していた琉球に対して、「琉球藩」を設置、さらに、79 年(明治 12 年)には、廃藩置県を断行して「沖縄県」を設置した。明治政府の強権行使と武力的威圧の下、琉球が一方的に処分され、四十七番目の「県」として、近代日本の国民国家に組み込まれたこの一連の政治過程を「琉球処分」という。
- 7) 比嘉春潮・霜多正次・新里恵二『沖縄』pp. 129-37, 岩波新書, 1963 年。
- 8) 「国民的同化」について、「琉球新報」創刊者の一人で、近代沖縄を代表するジャーナリスト・政治家の太田朝敷(1865-1938)は、次のように述べている。「我県民をして同化せしむるということは、有形無形を問わず、善悪良否を論ぜず、一から十まで内地他府県に化すること、類似せしむること

なり。極端に云へば、クシャメすることまで他府県人の通りすると云うにあり。」この太田の言説は、「クシャメ論」といわれ、伊波普猷と並ぶ近代沖縄における指導的インテリのラディカルな日本同化志向を象徴するものとして著名である。

- 9) アカデミズムにおける日琉同祖論の提唱・発展は伊波普猷をもって基点とするが、前史を遡源すれば、琉球王政の摂政・羽地朝秀(1617-75)や三司官・宜湾朝保(1823-76)等、王政の衰退から親日的政策を志向した近世政治家によって政策論的に唱導された。
- 10) 住谷一彦・Josef Kreiner『南西諸島の神観念』pp. 185-190, 未来社, 1977年。
- 11) クライナー(前掲1977)は、「沖縄学」という学術語の発祥について、「伊波普猷の没年(昭和22年)頃に沖縄史学者の金城朝永によって使われ始めた。」とし、「その二年後あたりから、『沖縄学』という専用語がごく普通になり、一般によく使われるようになっていくような印象を受ける。」と述べている。
- 12) 琉球処分は、内務省を組織した大久保利通によって着手され、大久保の死後、内務卿(内務大臣)の地位を継いだ伊藤博文の手によって総仕上げが行われた。因みに、フランスの法学者で、内務省の顧問となったボアソナード(Gustave Emile Boissonade)は、琉球処分に際し、琉球人民の心服を得た上で事を運ぶべきであることを主張したが、明治政府は、この進言を無視する形で琉球処分を断行したのである。
- 13) 『古琉球』巻頭の一論考、「琉球人の祖先に就いて」では、本土では死語化しながら沖縄では使われ続けている言葉を数多く取り上げ、それらを「琉球人の祖先が大和民族と手を別ちて南方に移住した頃に有つてゐた言葉の遺物」とする見解を示し、言語学的例証から「南下説」を裏打ちしている。
- 14) 柳田・伊波の学問的接触・交流と理論的背後関係については、森田(1988)に詳しい。
- 15) 益田勝実「民俗の思想」『現代日本思想体系30 民俗の思想』p. 43, 筑摩書房, 1964年。
- 16) ここに伊波が表現した「内股膏藥主義」、及び、「御都合主義」という言辭が、上述の「娼妓主義」と合わせて「事大主義」と同義語であることを留意されたい。伊波は、これらの言辭で沖縄人の思想性に顕著な負的特質を規定し、かつ、糾弾したのである。
- 17) 1609年(慶長14年)、薩摩藩島津氏が琉球に侵寇した事件。「慶長の役」とも呼ばれる。以後、薩摩の琉球支配は、明治初期まで、約270年の多年に渡り続き、当該年間の琉球は、中国の保護下に「王国」としての主権性を維持しつつ、薩摩の配下に徳川幕藩体制の構成員を成す日中への二重従属(両属)状態にあった。
- 18) 上間(2007)。「事大主義」に関する別面の詳論は、当拙稿を参照されたい。
- 19) この点について、G・H・カー(1956)に同様の見解を見ることができる。「慶長年間の薩摩の琉球侵略は、琉球人をして、琉球の政治・経済・社会組織のいずれの面の標準をも自ら決定し、発展させることが困難な状態に陥れた。その結果、琉球の支配階級は、自国の属する二大国のいずれとも衝突することのないように言論・行動に常に留意しなければならなかった。このような日中両国への二重従属が、琉球人のかつては旺盛だった独立心・自尊心・自負心を次第に破壊し、代わりに妥協や調節の手續が生きていく上での不可欠手段となった。外国の支配を承諾せねばならなかった必要が人々の心に植え付けられ、習慣となったのである。二世紀半に渡るこの二重従属は、琉球人の性格に著しい跡を留めている。」
- 20) 1910年(明治43年)の「韓国併合」においては、所謂「日鮮同祖論」が、大日本帝国による韓国同化政策を正当化するためのイデオロギー装置となった。

参考文献

- 東江平之, 1991, 「沖縄人の意識構造の研究」『沖縄人の意識構造』沖縄タイムス社。
東江平之, 1991, 「『本土』という言葉を考える」

『沖縄人の意識構造』沖縄タイムス社.

Goethe, Johann Wolfgang von, *Italienische Reise* (1960-1961, 相良守峯訳『イタリア紀行 (中巻)』岩波書店).

比嘉春潮・霜多正次・新里恵二, 1963, 『沖縄』岩波新書.

伊波普猷, 1974, 『伊波普猷全集第一巻』平凡社.

伊波普猷, 1974, 『伊波普猷全集第二巻』平凡社.

伊波普猷, 1974, 『伊波普猷全集第五巻』平凡社.

伊波普猷, 1974, 『伊波普猷全集第七巻』平凡社.

Kerr, George. H, 1956, *Ryukyu: Kingdom and province before 1945* (=1956, 野崎氏を中心とする琉球大学関係者訳『琉球の歴史』琉球列島米国民政府).

益田勝実, 1964, 「民俗の思想」『現代日本思想体系 30 民俗の思想』筑摩書房.

門奈直樹, 1996, 『アメリカ占領時代沖縄言論統制史』雄山閣.

森田俊男, 1988, 『個性としての地域・沖縄』平和文化.

野口武徳, 1980, 『南島研究の歳月：沖縄と民俗学との出会い』東海大学出版会.

太田朝敷, 1993, 「琉球新報は何事を為したる乎」『太田朝敷選集上巻：政治・自治篇』第一書房

太田朝敷, 1995, 「紙面改良の辞」『太田朝敷選集中巻：経済・社会篇』第一書房

関広延, 1990, 『沖縄びとの幻想』三一書房.

住谷一彦・Josef Kreiner, 1977, 『南西諸島の神観念』未来社.

上間常道, 1987, 「沖縄学—アイデンティティをめぐって」『思想の科学 第7次』思想の科学社.

上間創一郎, 2007, 「沖縄の民族思想とホスピタリティ」『社会学研究科年報』立教大学大学院社会学研究科.

梅原猛, 1989, 『日本人の「あの世」観』中央公論社.

柳田國男, 1989, 「海南小記」『柳田國男全集 1』

筑摩書房.

柳田國男, 1989, 「海上の道」『柳田國男全集 1』

筑摩書房.

柳田國男, 1989, 「郷土生活の研究法」『柳田國男全集 28』筑摩書房.

吉本隆明, 1969, 「異族の論理」『文芸』河出書房新社.

※本論中の伊波普猷の諸論考は『伊波普猷全集』各巻に拠るが、煩雑回避のためここでの細述は避けた。